

# 『十三世紀フランス語聖書』 (*Bible française du XIIIe siècle*) 彩飾写本研究：地域展開の諸相

## Manuscrits enluminés de la *Bible française du XIIIe siècle* : divers aspects de la diffusion régionale

駒田 亜紀子 Akiko KOMADA

はじめに<sup>1</sup>

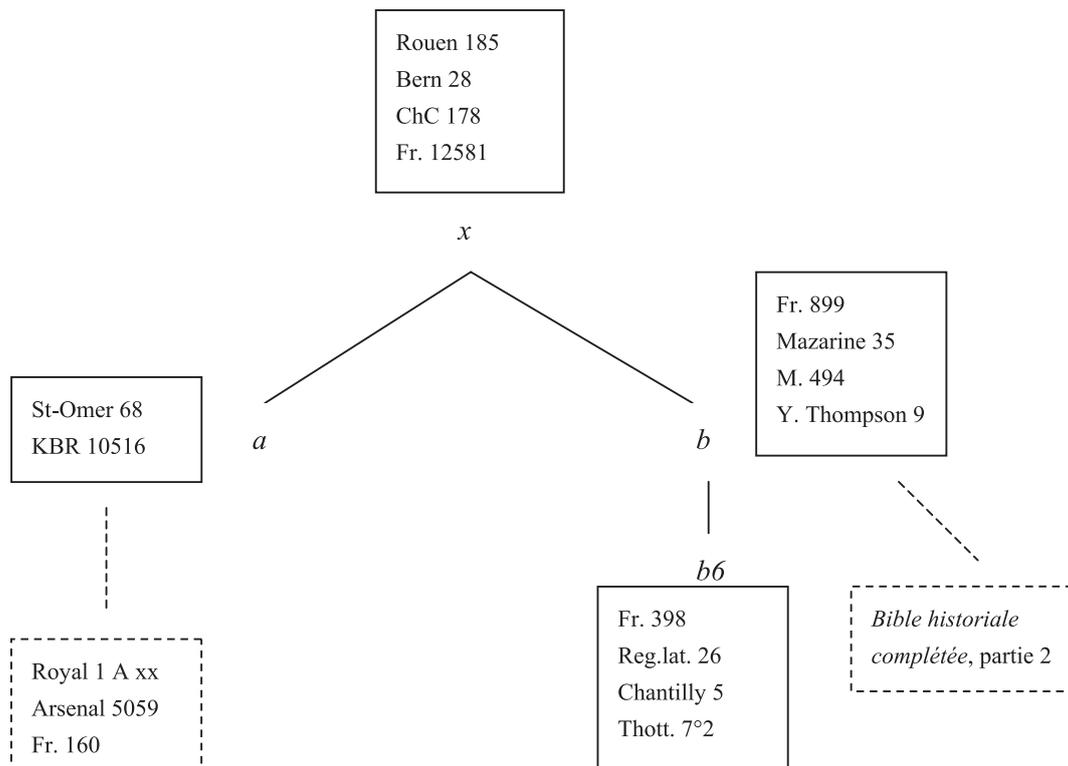
『十三世紀フランス語聖書 *Bible française du XIIIe siècle*』は、13世紀中葉にパリで成立した、初の完訳版フランス語聖書である<sup>2</sup>。今日、断片を含め、13世紀後半から15世紀後半にかけて制作された30点余の写本作品が伝存するが、その多くは何らかの挿絵彩飾を伴う作例である<sup>3</sup>。本稿では、『十三世紀フランス語聖書』写本伝承系統 (*stemma*) 上失われたオリジナルに最も近いとされる写本の一つ、ベルン市民図書館28番写本 (Bern, Bugarbibliothek, ms. 28; 以下、Bern 28と略す) (図1-4) を取り上げ、その美術史的位置づけを検証し、『十三世紀フランス語聖書 *Bible française du XIIIe siècle*』の初期写本伝承における地域展開の様相の一端を明らかにしたい。

### 1. 『十三世紀フランス語聖書』初期写本伝承と Bern 28の位置付け

『十三世紀フランス語聖書 *Bible française du XIIIe siècle*』は、サミュエル・ベルジェが1884年に公刊した中世フランス語聖書研究の第3部において、13世紀中葉にパリで成立した散文体フランス語によるラテン語ウルガータ訳聖書の初の全訳テキストを指して命名した、写本テキストである<sup>4</sup>。1884年当時、このテキストを完本の状態で収録した写本の存在は知られていなかったが、ベルジェは、聖書前半部については現存最初期の作例の一つ Fr. 899 (パリ、1270-75年頃) を筆頭に6点の写本 (Fr. 6-7; Arsenal 5056; Harley 616; Cambridge E. e. 3. 52; Strasbourg C iv 10) を、聖書後半部については同じく Fr. 899に加え8点の写本 (Mazarine 35; Fr. 398; Reg. lat. 26; Fr. 6258; Rouen 185; KBR 10516; Fr. 12581; ChC178) を、『十三世紀フランス語聖書』の失われたオリジナルに近い作例として挙げている<sup>5</sup>。

一方、ベルジェの研究では検討対象とされなかった写本や1884年当時は存在が知られていなかった写本を加え、新約聖書諸書の校訂版編纂に向けて詳細な分析・考察を行っているのが、1960年代以降に発表されたデ・ポールク、デコー、スネッドンらによる研究である<sup>6</sup>。中でも、クライヴ・スネッドンは、1978年オクスフォード大学に提出した博士論文とその後発表した雑誌論文において、『十三世紀フランス語聖書』福音書の伝承初期段階のテキストを伝える写本として、ベルジェによる上述の9写本のリストにさらに6点の作例 (Bern 28; St-Omer 68; M. 494; Y. Thompson 9; Thott 7° 2; Chantilly 5)<sup>7</sup>を検討対

象として追加し、初期写本伝承系統図 (*stemma*) を作成した (挿図 A)<sup>8</sup>。それによれば、『十三世紀フランス語聖書』福音書テキストの初期伝承には4つの段階 (*states*)、すなわち初期段階 *x*、これより派生した二つの相互に独立した改訂版 (*revision*) *a* および *b*、そして改訂版 *b* よりさらに派生した *b6* を識別することができる<sup>9</sup>。本論で取り上げる Bern 28は、スネッドンによる初期写本伝承系統図では、ベルジェの「初期」写本リストに当初より含まれていた Rouen 185、Fr. 12581および ChC 178とともに、失われたオリジナルに最も近い初期段階 *x* に位置づけられており、Rouen 185を底本とする校定版編集においても参照されている。



挿図A クライヴ・スネッドンによる『十三世紀フランス語聖書』福音書の初期写本伝承系統図 (*Stemma*) (図中の実線部分は SNEDDON 1978, t. 1, p. 64; Idem., 1999, p. 10; Idem., 2002, *Festschrift*, p. 38掲載の系統図に基づき作図; 『増補版歴史物語聖書 *Bible historique complétée*』後半部の派生を示す破線部分は、Idem., 1998, p. 241 - 242の記述に基づく筆者による付加)

スネッドンによる写本伝承系統図をここで詳しく検討する余裕は無いが、『十三世紀フランス語聖書』初期写本の需要・供給・受容の実態を挿絵彩飾の様式ならびに図像学的考察を通じて解明せんとする我々の探究と写本テキストの伝承系統研究との関連において浮上する問題点を、将来の議論も視野に入れつつ、以下に整理しておきたい<sup>10</sup>。

- (1) 写本制作地の地理的拡散：写本伝承系統上オリジナルに最も近いとされる初期段階 *x* とこれに若干の変更を加えた改訂版 *a* に属する6写本は、いずれも1270-1290年代の制作であるが、その制作地はフランス北部 (Rouen 185; ChC 178; KBR 10516;

St-Omer 68<sup>11</sup>)、フランス南西部ラングドック地方ないしはスペイン・カタロニア地方 (Bern 28)、シャンパーニュ地方 (Fr. 12851) と、実に広範囲に及ぶ<sup>12</sup>。このことは、『十三世紀フランス語聖書』には『増補版歴史物語聖書 *Bible historique complétée*』にとっての1300~1420年代パリのような需要・供給の中心拠点<sup>13</sup>が存在しなかったことを示唆する。写本テキストの広範な地理的拡散をその成立から比較的短期間に可能ならしめるような幾つかのチャンネルが存在したと考えるべきであろう。この点について、筆者は、現時点では直接的な証拠を呈示することはできないが、十字軍遠征に関与した西ヨーロッパ各地の君公や騎士修道会士の彼我の地における交流が、我々の聖書の伝播・普及に重要な役割を果たしたのではないかと考えている<sup>14</sup>。

- (2) 写本テキストの言語的統一性：言語的特徴から『十三世紀フランス語聖書』写本テキストの最も古い相を代表するとされる Fr. 899<sup>15</sup>はパリ起源の写本であり<sup>16</sup>、またパリ以外の地域で制作されたことが明白な作例<sup>17</sup>も含め、ほとんどの初期写本にフランシアン方言（オイル語のイル・ド・フランス方言）的特徴が認められるという<sup>18</sup>。この事実は、『十三世紀フランス語聖書』成立の地をパリとする有力な論拠であり<sup>19</sup>、同時に、この写本テキストが成立後さほど時を経ずして（筆写を繰り返す中で制作地の方言色が浸透する間も無く）各地に伝えられたことを示唆する<sup>20</sup>。その一方で、かつてベルジェがオリジナルに最も忠実な写本であるとした Fr. 899やこれと同じ改訂版 *b* に属し同じくパリの制作と考えられる M. 494及び Y. Thompson 9<sup>21</sup>、そしていずれもパリの制作と考えられる改訂版 *b6* の4写本は、伝承系統上はむしろオリジナルから相対的に遠い位置にある。各種俗語写本の重要な需要・供給拠点として台頭しつつあった13世紀後半のパリにおいては、改訂という写本テキストの"世代交代"がより急速に進んだ結果と見ることもできよう。
- (3) 写本の内容構成と需要・供給のあり方：『十三世紀フランス語聖書』の初期写本には、ChC 178（新約聖書）のように、聖書全編からあるテキスト（群）を独立させ単体の写本とした作例や、Fr. 12581（聖杯伝説、鷹狩指南書、ブルネット・ラティーニ『宝典』等を含む俗語テキスト集成に4福音書を収録）のように、種々の俗語テキストを含むコンピレーション写本の一部として構想された作例が、少なからず存在する<sup>22</sup>。スネットンが指摘するように、旧約・新約聖書全編を2巻本構成の写本<sup>23</sup>とする形式が確立するまでにある程度の時間を要したことも、こうした「部分写本」が流通した一因であろう<sup>24</sup>。加えて、伝承の初期段階あるいは市場規模が小さい地方においては、1300~1420年代のパリにおける『増補版歴史物語聖書』のようにある程度の需要を見込んで（内容構成が一定の）写本を供給する量産システムとは異なり、個別のニーズに応じて制作された可能性が考えられる。『十三世紀フランス語聖書』中の任意のテキストを選択的にあるいは他の俗語テキストと併せて読む（聞く）需要・受容のあり方についても、考察を進めたい<sup>25</sup>。別稿において論じたように<sup>26</sup>、『十三世紀フランス語聖書』写本では他に類例を見ない ChC 178の特異な挿絵図像配置は、同

写本が典礼用に編纂された朗読用福音書 (évangélaire) や書簡集 (épistolier) をモデルとして制作された可能性を示唆している。

## 2. ベルン市民図書館28番写本 (Bern, Burgerbibliothek, Cod. 28)<sup>27</sup> (図1-4)

356フォリオ、345 x 250 mm；テキスト欄 (2欄37行)：235 x 170 mm

収録テキスト：箴言～黙示録

制作地：トゥールーズ／ラングドック地方

制作年代：1270-80年代

### (1) 写本の概要

Bern 28 は『十三世紀フランス語聖書』旧約聖書後半部 (知恵文学、預言書、マカバイ記) および新約聖書全編を収録する写本である。同写本を記録する現存最古の文献史料である1634年編纂の蔵書目録以来、『十三世紀フランス語聖書』の旧約聖書前半部 (創世記～詩編) すなわち Bern 28を補完するテキストを収録するベルン市民図書館27番写本 (Bern, Burgerbibliothek, Cod. 27; Bern 27と略す) とともに、2巻本構成の『フランス語聖書』完本を成すと看做されてきた<sup>28</sup>。しかしながら、本論で明らかにするように、Bern 28は挿絵彩飾および本文書体の特徴からフランス南西部 (トゥールーズ／ラングドック地方) ないしはスペイン・カタロニア地方に由来すると考えられるのに対し、Bern 27はドイツ語文化圏の制作と推定される<sup>29</sup>。もとより、両写本はサイズや本文の行数・レイアウト等の書冊学的与件も異なる<sup>30</sup>ことを勘案するならば、Bern 27と Bern 28は、ほぼ同時代 (1270-80年代) の作例ながら、2点の異なる『十三世紀フランス語聖書』写本の前半部 (Bern 27)・後半部 (Bern 28) に由来すると判断すべきであろう。

ベルン市民図書館所蔵の中世写本コレクションは、アンリ4世に仕えたフランス人外交官・人文主義者ジャック・ボンガルス Jacques Bongars (1554-1612) の蔵書に端を発し、Bern 27および Bern 28もこれに由来する<sup>31</sup>。ボンガルスの死後、500点余の写本を含む彼の蔵書は、遺産を相続したヤコブ・グラヴィセ Jacob Graviset (Gravisseth) の娘婿フランツ・ルードヴィヒ・フォン・エルラーハ Franz-Ludwig von Erlach により、1632年にベルン市に寄贈された。17世紀末、ボンガルス旧蔵書はベルン市立図書館に移管されたが、1951年、同図書館が写本コレクションを所蔵するベルン市民図書館 (Burgerbibliothek) と印刷本を所蔵するベルン市立・大学図書館 (Stadt- und Universitätsbibliothek) に分割されたのを機に、ベルン市民図書館の所蔵となり、今日に至る<sup>32</sup>。

ボンガルス蔵書となるまでの Bern 27および Bern 28の来歴は詳らかではないが、1632年のベルン市への寄贈後ほどなく作成された1634年の目録において両写本はすでに2巻本の聖書完本として記載されており、ボンガルス蔵書時代より2巻本構成の聖書完本として扱われていたことを窺わせる。一方、Bern 28および Bern 27の巻頭・巻末の遊び紙には、

聖書本文とは筆跡も年代も異なる、14-15世紀に遡る様々な書き込みが見出されるが、その中でも以下の2項目は、両写本の来歴を推測する上での手がかりとなる可能性がある<sup>33</sup>：

- (1) Bern 27 巻頭 fol. 1v および Bern 28 巻頭 fol. 3v に、14世紀後半に同一人物の手により書き込まれた、聖書前半部の内容一覧 (Bern 27) と後半部の内容一覧 (Bern 28：同写本の実際の収録内容とは細部に異同あり)；
- (2) Bern 28 巻頭のビフォリウム fols. 1v-2見開きに、14世紀に書き込まれた、バルセロナないしはバレンシアに言及する天体運行表<sup>34</sup>。

Bern 27 および Bern 28 巻頭の同一人物の手になる聖書内容一覧(1)が、由来の異なる両写本が単一のコレクションに収蔵され擬似的な完本として扱われるようになった時点で書き込まれた (14世紀後半) のか、あるいは両者本のいずれか一方ないしは第3の写本に由来する聖書内容一覧が両写本の単一コレクション収蔵後のある時点で巻頭に加えられたのかは定かではない。これらの書き込みについて、1953年刊の図録内の解説において Bern 28 の挿絵彩飾に関する入念な分析を行ったオットー・ホンブルガーは、Bern 28 と Bern 27 は版型も挿絵彩飾様式も全く異なることを指摘し、ボンガルスが一方の写本に欠ける内容を補うために他方を購入して完本にしたと推測する<sup>35</sup>。また、Bern 28 の内容一覧と実際の収録内容に認められる細部の異同に注目するならば、Bern 27 および Bern 28 巻頭の内容一覧は、Bern 27 ないしは第3の聖書写本に由来する14世紀後半の内容一覧が、Bern 27 および Bern 28 の単一コレクション収蔵後のある時点で、両写本を2巻本構成の聖書完本として扱うために (Bern 27 および) Bern 28 に加えられたとも考えられる。

他方、Bern 28 冒頭ビフォリウムに書き込まれた (おそらく) バルセロナに言及する天体運行表(2)については、これが Bern 28 にすでに綴じ込まれていたビフォリウムに書き込まれたものであるにせよ、あるいは天体運行表が書き込まれたビフォリウムが遊び紙として装丁の補修時などに綴じ込まれたものであるにせよ、Bern 28 の挿絵彩飾の様式分析より導かれる制作地を傍証する資料であると、我々は考える。

## (2) 研究史

Bern 28 は、サミュエル・ベルジェの1884年の著書やこれを補足するポール・メイエル  
の1888年の書評においては取り上げられなかった『十三世紀フランス語聖書』写本の一つである。管見によれば、ベルジェの定義に基づき Bern 27 および Bern 28 を『十三世紀フランス語聖書』のそれぞれ前・後半部と同定したのは、H. フォルマーの中世聖書写本に関する一連の論考の第1巻・第2部 (1916年)<sup>36</sup>が初出である。しかしながら、Bern 28 が中世散文体フランス語聖書研究において本格的な論考の対象となったのは、フランス語聖書の語彙分析を主眼とする M. オレッリの博士論文 (1975年刊)<sup>37</sup>と、『十三世紀フランス語聖書』4福音書の校定版編纂を目指す C.R. スネッドンの博士論文 (1978年)<sup>38</sup>ならびにこれに続く一連の雑誌論文<sup>39</sup>以降のことである。上述のように、C.R. スネッドンによる

初期写本伝承系統図（挿図 A 参照）では、ベルジェの「初期」写本リストに当初より含まれていた Rouen 185、Fr. 12581 および ChC 178 とともに、Bern 28 は失われたオリジナルに最も近い初期段階  $x$  に分類されており、『十三世紀フランス語聖書』写本テキスト研究において、最も重要な作例の一つと位置づけられている。ただし、Bern 27 および Bern 28 が起源の異なる別個の写本にそれぞれ由来することを明確に論じた考察は、筆者の知る限り、中世散文体フランス語聖書研究においては発表されていない<sup>40</sup>。

一方、Bern 28 の挿絵彩飾に関しては、1953 年刊行の図録におけるオットー・ホンブルガーの解説<sup>41</sup>ならびに彼が1960年頃作成した未刊行のタイプ原稿によるベルン市民図書館所蔵主要彩飾写本の目録<sup>42</sup>を除き、筆者の知る限り、美術史研究における本格的な言及はなされていない。その制作地についても、北フランスとする説（クライブ・スネッドン<sup>43</sup>）と、南フランスとする説（ホンブルガー）とがあり、いまだに決着を見ないようである。

ホンブルガーは、1953年の図録において、Bern 28 と Bern 27 は版型も挿絵彩飾の様式も全く異なることを指摘し、Bern 28 に欠ける旧約聖書前半部を補完するためにボンガルスが Bern 27 を購入し、両者に相前後する写本番号を付したと推測する。また、Bern 28 冒頭のおそらくバルセロナに言及する14世紀の天体運行表に注目し、同写本が完成後ほどなくしてスペインに持ち込まれたと考えた。また、制作年代については、挿絵彩飾の様式的特徴に照らし、13世紀の最後の30年間としている。一方、Bern 28 の制作地については、1953年刊の図録では言及していないが、1960年頃作成された未刊行のタイプ原稿では、これを南フランスとしている<sup>44</sup>（ちなみに、所蔵図書館がおそらく1990年代に発行したルカ伝序文冒頭イニシアル（図3）のカラー図版を掲載する絵葉書のキャプションも、制作地を南フランスとしている）。

一方、スネッドンは、バレンシアないしはバルセロナに言及する Bern 28 冒頭の天体運行表を同写本の制作地推定の根拠の一つとすることに疑念を呈し、Bern 28 は、初期写本伝承系統（挿図 A 参照）において同写本とともに初期段階  $x$  に属する ChC 178<sup>45</sup> と同じく、北フランスに由来すると主張する<sup>46</sup>。

以下に続く本論では、Bern 28 の挿絵彩飾の様式的特徴ならびに制作地について、基本的にホンブルガーの見解を支持する立場から、ラングドックないしはカタロニア地方の13世紀最終四半期～14世紀第1四半期の彩飾写本に関する近年の研究成果を参照しつつ、考察を進める。

### (3) 彩飾の様式的特徴

Bern 28 の挿絵彩飾は、以下の要素より構成される：① テキスト欄1コラム（幅約78ミリ）の1/2～2/3程度の幅を占める物語イニシアル（図1-4）；② ①のイニシアルからテキスト・コラムに沿ってページ上下の余白に伸びる、バケットおよびアンテナ装飾（図1-4）；③ 物語イニシアルを伴わないテキスト下位分節の冒頭を示す、本文2行分の高

さの朱・青インクによるフィリグラ（線條装飾）イニシアル（図4）；④ ③のイニシアルからテキスト・コラムに沿ってページ上下の余白に伸びる、朱・青インクによるフィリグラを伴うバゲット装飾（図4）；⑤ ページ上辺余白に配される朱・青インクによるランニング・タイトル（図1, 3, 4）、である。現状では、大型の物語イニシアルあるいはテキスト欄1コラム分の幅の長方形パネル状ミニアテュールを伴っていたと思われる、写本冒頭の箴言の第1葉が失われているほか、10点ほどの物語イニシアルが切り取られている。

Bern 28の物語イニシアルの彩飾は、その完成度に質的なばらつきが認められるものの様式的な均質性は高く、主要画家とそれを補佐するアシスタント（たち）により構成されるとされる彩飾画家の手を明確に識別するのは困難である。

Bern 28の挿絵彩飾の特徴は、まず、ハイライトや陰影によるモデリングの乏しい平面的な賦彩と、色面を区切る黒の輪郭線や衣襷の描き起こし線により強調される形態把握に求められる（図1-4）。ややくすんだ色調の青・赤・朱・サーモンピンク・白に少量のエメラルド・グリーンを伴うパレットは、画面全体にやや暗く厳めしい印象を与える。限られたスペース内に複数の人物やモチーフを並べた画面の背地には、多くの場合、ドットを繋いだ円環文を伴う研磨された金地が用いられる。登場人物が比較的少ない場合には、三つ葉型アーチなどの建築モチーフにより登場人物のシルエットをなぞるように囲み（図3）、その上方のスペースに遠方の町並みを想起させる小さな塔や屋根型を更に重ねる場合もある。長身瘦躯の人物を包む衣は、立像の場合、平行線を描きながら裾へと落ちる直線的なドラプリのタイトな長衣と、大振りだがヴォリュームを抑えた三角形のドレープで肩から腕を覆うマントを、特徴とする（図1, 2, 4）。座像の場合、人物の纏うマントは、腰から両足にかけてのシルエットをなぞるようにタイトな輪郭を描き、屈曲した両膝の間に鋭角な襷を畳む（図3）。マントの縁や頭光あるいはアーチなどのモチーフを囲む輪郭線の内側には、これをなぞるように白の細い縁取り線がしばしば引かれる（図3）。

以上にその概略を示した、Bern 28の賦彩や人物の形態把握、あるいはドラプリの特徴は、パリを含む北フランス・ゴシック様式の13世紀第3四半期の挿絵彩飾にも共通して認められる特徴であり<sup>47</sup>、しばしば指摘されるように、13世紀後半におけるパリ写本彩飾様式の地方への浸透を例証するものと言えよう<sup>48</sup>。一方、登場人物の相貌や彩飾イニシアル、イニシアルから伸びるバゲットおよびアンテナ装飾とこれらに伴うドロルリー・モチーフ、あるいはペン線描によるフィリグラには、1270～1310年代のフランス南西部あるいはスペイン・カタロニア起源の写本彩飾に特徴的な造形要素を認めることができる。

Bern 28の物語イニシアルに描かれる男性登場人物は、面長で頬骨が隆起した（あるいは顎がしゃくれた）頭部の輪郭と、吊り上がり気味の眉から鼻梁に続くラインに接する目頭に黒目を寄せた藐眊み気味の相貌を、特徴とする（図1, 4）。特に側面観の場合、エ

ラの張った顔の輪郭とも相まって、寄り目がちな顔つきの印象は強まる（図3）。こうした相貌上の特徴は、近年の研究において1270～1310年代のトゥールーズ／ラングドック地方の制作に帰されるようになった一群のラテン語聖書写本（図5，8）に、程度の差はあれ、共通して認められる特徴でもある<sup>49</sup>。

これらのラテン語聖書と Bern 28 の類似点は、人物の相貌表現に留まらない。A5版程度あるいはそれ以下の小型サイズが主流の13世紀パリのラテン語聖書<sup>50</sup>とは異なり、これらのラテン語聖書は Bern 28 とほぼ同サイズのフォリオ版である<sup>51</sup>。余裕のある版型を活かし、これらのラテン語聖書では、創世記冒頭の I (*n principio creavit*…) イニシアルに伴い、ページ上下辺の余白に、頭部を突き合わせた2頭のドラゴンから左右に伸びる尾を蔓草のアラベスク文へと転化させたアンテナ装飾をしばしば配する（図6，7）。これらのアンテナ装飾のいわば幹をなす蔓草文は、多くの場合、柊の葉状の突起あるいは虫食い状の凹凸のある輪郭を伴うサーモンピンクないしはブルーの地でさらに囲まれる。フランス語聖書である Bern 28 に同様の「I」イニシアルは無いが、類例として、パウロ書簡テモテ書冒頭の話イニシアル「P」の縦棒（haste）の上端からページ上辺余白に伸びるアンテナ装飾に、正面向きのドラゴン頭部から左右に伸びる2本の尾がページの横幅一杯の蔓草アラベスク文へと転化する意匠を指摘することができる（図4）。こうしたアンテナ装飾には、他にも、イニシアルの縦棒（haste）に噛みつくドラゴンの尾から転じてページ余白を大きく斜めに横切る蔓草（図2，4，8）や、渦巻く蔓を起点に風車の羽根状に複数の枝を伸ばす茎状のモチーフ（図1，5，7）など、フランス南西部あるいはカタロニア起源の聖書写本（図9）を中心に展開した独特の意匠が見出される<sup>52</sup>。

こうしたイニシアルおよびアンテナ装飾において、南西フランスあるいはカタロニア起源の作例に特徴的な意匠としてさらに注目しておきたいのが、バゲットやアンテナの起点がイニシアル本体から矩形をなして張り出し、その内部に渦巻く蔓やドラゴンあるいはグロテスク・モチーフを伴うタイプである（図1-4）。バゲットやアンテナの張り出した角や外周には、金地の小さな円形モチーフを伴う場合が少なくない（図1-4）。また、PやFの縦棒（haste）を文字本体の弓状に張り出した部分（anse）の下方で矩形のパネル状に拡張し内部を碁盤目状の文様やアラベスク文で埋める独特の意匠も、Bern 28 とフランス南西部あるいはカタロニア起源の作例に共通する特徴的な細部である（図3，4，8）<sup>53</sup>。

アンテナ装飾を構成する蔓草文の周囲に賑やかに配された、戦闘あるいは狩猟人物群さらには小動物や種々のグロテスクよりなるドルルリーは、13世紀後半のカタロニアに由来するフォリオ版の聖書写本に特徴的な意匠であり（図9）、13世紀末から14世紀初頭にかけて次第にフランス南西部の作例にも浸透してゆく（図6，7）<sup>54</sup>。Bern 28 におけるこの種のドルルリーの扱いは、現存するイニシアルを観察する限り、いまだ限定的である（図2，4）。

Bern 28 の制作地を推定する手がかりは、朱・青インクによるフィリグラン（線條装

飾) 装飾においても指摘することができる。13世紀後半～14世紀前半の南西フランスおよびカタロニア起源のラテン語聖書写本では、ページ上辺余白に記される朱・青インクの大文字によるランニング・タイトルの両端に、小さな結び目を伴う緩やかなループ状モチーフを左右対称に配することが多い(図6, 7, 10)。Bern 28にも同様のループ状モチーフが見出されるが、さらに注目しておきたいのは、ランニング・タイトルを構成する個々の文字に、朱ないしは青インクにより、縦方向に平行線を数本引き並べた簡素な簾状のフィリグランが施されていることである(図1, 3, 4)。ランニング・タイトルを構成する個々の文字に本文中のイニシアルに匹敵する精緻なフィリグランを施す例は特に14-15世紀フランスの豪華な世俗写本彩飾において枚挙に暇が無いが、Bern 28に見られるような簡素な簾状のフィリグランは、筆者の知る限り、同時代のカタロニア(図10)や北イタリアに類例を見出すのみである<sup>55</sup>。一方、本文中のイニシアルに目を転ずれば、縦方向に平行線を2, 3本引き並べたシンプルなパターンのフィリグランは、同時代の北イタリア写本に典型的な意匠の一つである<sup>56</sup>。

最後に、Bern 28のフランス南西部ないしはカタロニア起源を傍証する今ひとつの要素として指摘しておきたいのが、本文の書体である。Bern 28の本文は複数の写字生により筆写されているが、いずれも、淡色の褐色系インクによる、幅の狭い角張った書体の特徴とする<sup>57</sup>。同様の特徴は、程度の差はあれ、本論でも比較例として取り上げたフランス南西部ないしはカタロニア起源の主として聖書写本に広く認められるものである(図2, 3, 5, 8, 10)。研究の現状では、制作地・年代を比定する際の基準となる書体の例を示しこれと具体的な比較を行うことは困難であるが、今後の課題としたい。

Bern 28の挿絵彩飾に関する以上の考察では、同写本に1270～1310年代のフランス南西部ないしはスペイン・カタロニア起源の聖書写本に特徴的な造形要素が認められることを、近年の研究成果を参照しつつ、個別の要素の具体的な比較検証を通じて明らかにしてきた。研究の現状では、作品の制作時代に遡る来歴が詳らかでない場合、その制作地を具体的な地名にまで絞り込むことは困難である。しかしながら、Bern 28においては、13世紀最終四半期のカタロニアの作例を特徴づける種々のドロルリーの扱いが控えめであること、柵葉あるいは虫食い葉状のサーモンピンクないしはブルーの地を伴うアンテナ装飾の扱いにおいてトゥールーズないしはラングドック地方起源とされる作例(図7, 8)により顕著な類似性を示すこと、また、制作年代が下るにつれて次第に顕著となる人物のドラプリーや相貌の陰影モデリングが我々の写本では未だ殆ど認められないことから、1270-80年代のトゥールーズないしはラングドック地方を、その起源として提案したい。

### 3. 結語にかえて

本論の考察は、『十三世紀フランス語聖書』福音書テキストの失われたオリジナルに最も近い写本群に属するBern 28の美術史的な位置づけを検証し、1270-80年代という『十三世紀フランス語聖書』写本伝承の初期段階において、同写本テキストがトゥールーズ／ラ

ングドック地方にまで及んでいたことを明らかにするものである。『十三世紀フランス語聖書』研究の主流であるテキスト研究においては実質的な検討に付されることが殆どなかった Bern 28の制作地を巡る我々の議論の射程は、同写本1点の問題に留まるものではない。Bern 28は、『十三世紀フランス語聖書』が写本伝承の初期段階においてすでに極めて広範な伝播経路を持っていたことを例証すると同時に、写本テキストの広範な地理的拡散をその成立から比較的短期間に可能ならしめるような幾つかのチャンネルについて具体的な考察を進める上でも、極めて貴重な作例の一つである。パリ／イル・ド・フランス地方をテキスト成立の地とし広義の北フランスを中心に進められてきた『十三世紀フランス語聖書』初期写本伝承研究に、改めて一石を投じる視座ともなろう。

**【本論で取り上げる『十三世紀フランス語聖書』主要写本の略号一覧】（アルファベット順）**

- ・ Arsenal 5056 = Paris, Bibliothèque de l' Arsenal, ms. 5056 『十三世紀フランス語聖書』前半部（創世記～詩篇）：パリ、1280-85年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 8, pp. 154 - 155.
- ・ Bern 28 = Bern, Burgerbibliothek, ms. 28 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：フランス南西部、1280-90年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 13, pp. 161 - 164.
- ・ Cambridge Ee. III. 52 = Cambridge, University Library, ms. Ee. III. 52 『十三世紀フランス語聖書』旧約聖書、部分（創世記～ヨブ記）：イングランド、1320-30年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 6, pp. 152 - 153.
- ・ Chantilly 5 = Chantilly, Musée Condé, ms. 5 (mss. 4 & 5) 『十三世紀フランス語聖書』完本・後半部（箴言～黙示録；前半部は ms. 4）：パリ、1300年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 1, pp. 142 - 144.
- ・ ChC 178 = Oxford, Christ Church Library, ms. 178 『十三世紀フランス語聖書』新約聖書（4福音書～黙示録）：北フランス、1270年代前半？ cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 28, pp. 191 - 194 ; 拙論、2012。
- ・ Fr. 6-7 = Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 7 (mss. fr. 6 & 7) 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録；前半部は ms. 6）：フランス中部、1430年代。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 9, pp. 155 - 157.
- ・ Fr. 398 = Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 398 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：パリ、1280-90年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 21, pp. 175 - 176.
- ・ Fr. 899 = Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 899 『十三世紀フランス語聖書』部分（創世記、出エジプト記、民数記～詩篇、4福音書、使徒行伝、公同書簡（ヤコブ、1ペトロ、2ペトロ）、黙示録）：パリ、1270-75年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 4, pp. 148 - 151 ; 拙論、2009。

- ・ Fr. 6258 = Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 6258 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：パリ？1440年代。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 22, pp. 176 - 177.
- ・ Fr. 12581 = Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 12581 『十三世紀フランス語聖書』4福音書を含むフランス語テキスト集成：シャンパーニュ地方、1284年。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 29, pp. 194 - 197.
- ・ Harley 616 = London, British Library, Harley ms. 616 『十三世紀フランス語聖書』前半部（創世記～詩編）：パリ、1280-85年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 2, pp. 144 - 146.
- ・ KBR 10516 = Bruxelles, Bibliothèque royale de Belgique / Koninklijk Bibliotheek van België, ms. 10516 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：北フランス、1280-90年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 14, pp. 164 - 165 ; 拙論、2011。
- ・ M. 494 = New York, The Morgan Library, ms. M. 494 『十三世紀フランス語聖書』完本：パリ、1280年代初頭。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 3, pp. 146 - 148 ; 拙論、2010。
- ・ Mazarine 35 = Paris, Bibliothèque Mazarine, ms. 35 (= olim ms. 684) 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：北フランス、1280-90年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 18, pp. 169 - 173.
- ・ Reg.lat. 26 = Vatican, Biblioteca Apostolica Vaticana, ms. Reg. lat. 26 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：パリ、1290年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 25, pp. 184 - 185.
- ・ Rouen 185 = Rouen, Bibliothèque municipale, ms. 185 (= olim A 211) 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：北フランス、1270-80年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 23, pp. 178 - 181.
- ・ St-Omer 68 = Saint-Omer, Bibliothèque d'Agglomération, ms. 68 『十三世紀フランス語聖書』後半部（箴言～黙示録）：北フランス、1280-90年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 24, pp. 181 - 184 ; 拙論、2011。
- ・ Strasbourg C IV. 10 = Strasbourg, Bibliothèque nationale et universitaire, ms. C IV. 10 『十三世紀フランス語聖書』旧約聖書、部分（創世記～詩篇）（1870年焼失）：制作地・制作年代不明（15世紀?）。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 11, pp. 159 - 160.
- ・ Thott. 7°2 = Copenhagen, Royal Library, ms. Thott. 7°2 『十三世紀フランス語聖書』後半部（詩篇～黙示録）パリ、1290-1300年頃。cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 15, pp. 165 - 166.
- ・ Y. Thompson 9 = London, British Library, Yates Thompson ms. 9 (= olim Additional ms. 41751) 『十三世紀フランス語聖書』完本・後半部（箴言～黙示録；前半部は London, British Library, Harley ms. 616）：パリ、1280-85年頃。cf. SNEDDON 1978,

t. 1, cat. no. 2, pp. 144 - 146.

#### 【図版キャプション一覧】

- 1 Bern, Burgerbibliothek, Cod. 28, fol. 34v
- 2 Bern, Burgerbibliothek, Cod. 28, fol. 121
- 3 Bern, Burgerbibliothek, Cod. 28, fol. 244
- 4 Bern, Burgerbibliothek, Cod. 28, fol. 312v
- 5 Toulouse, Bibliothèque municipale, ms. 1, fol. 1
- 6 Toulouse, Bibliothèque municipale, ms. 1, fol. 3v
- 7 Cleveland Museum of Art, ms. 2008.02, fol. 1
- 8 Cleveland Museum of Art, ms. 2008.02, fol. 136
- 9 Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. lat. 30, fol. 4v
- 10 Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. lat. 39, fol. 69v

#### 註

1 本稿は、筆者が2002年度に鹿島美術財団より研究助成を受けた研究について2003-2004年に発表した2件の研究報告（「13世紀フランスを中心とする聖書図像の伝播・交流に関する研究－『十三世紀フランス語聖書』写本挿絵の展開－」鹿島美術財団編『鹿島美術研究年報』第20号別冊、平成15（2003）年、p. 471-480、および2004年5月鹿島美術財団にて口頭で行った研究報告）においてその概要を示し、平成19-22年度科学研究費補助金（基盤研究C）対象の研究課題（課題番号19520101「中世後期の西ヨーロッパ彩飾写本に見られる十字軍遠征の影響に関する基礎研究」）において発展させた、『十三世紀フランス語聖書』彩飾写本研究の続編である。

2 『十三世紀フランス語聖書』写本テキストに関する主要な研究としては、拙論「『十三世紀フランス語聖書』(Bible française du XIIIe siècle) 彩飾写本研究：最初期の作例について」、『実践女子大学美術学』第23号（2009）、pp. (39) - (53)；拙論「『十三世紀フランス語聖書』(Bible française du XIIIe siècle) 彩飾写本研究：〈パリ-アッコンの画家〉帰属作品について」、『実践女子大学美術学』第24号（2010）、pp. (39) - (55)；拙論「『十三世紀フランス語聖書』(Bible française du XIIIe siècle) 彩飾写本研究：フランス北部の作例と〈パリ-アッコンの画家〉をめぐって」、『実践女子大学美術学』第25号（2011）、pp. (17) - (38)；拙論「『十三世紀フランス語聖書』(Bible française du XIIIe siècle) 彩飾写本研究：オクスフォード、クライスト・チャーチ図書館所蔵《新約聖書》について」、『実践女子大学美術学』第26号（2012）、pp. (17) - (37)の各論文において引用した文献、および以下の註4、6を参照。

3 主要な『十三世紀フランス語聖書』挿絵入り写本については、註1に引用した拙論2003中のリストを参照（修正の必要あり）。

4 BERGER (S.): *La Bible française au Moyen Age. Etude sur les plus anciennes versions de la Bible écrites en prose de langue d'oïl*. Paris, 1884, 3<sup>e</sup> partie. Cf. MEYER (P.), C.R. de BERGER 1884, in: *Romania*, XVII (1888), pp. 121-141.

5 BEGER 1884, pp. 111-119, 448.

6 Cf. DE POERCK (G.), *La Bible et l'activité traductrice dans les pays romans avant 1300*, in : *Grundriss der romanischen Litteraturen des Mittelalters, vol. VI : La littérature didactique, allégorique et satyrique*, Heidelberg, 1968 - 1970, 2 vols., I, pp. 21 - 48 & II, pp. 54 - 80; DECOO (W.), *La Bible française du XIIIe siècle et l'Evangile selon Marc. Remarque critique*, in : *Romanica Gandensia*, 12 (1969), pp. 53 - 64; SNEDDON (C.R.): *A Critical Edition of the Four Gospels in the Thirteenth-Century Old French Translation of the Bible*. Ph. D., 2 vols., University of Oxford, 1978; Idem., *The "Bible du XIIIe siècle": its Medieval public in the light of its manuscript tradition*, in : LOURDAUX (W.), VERHELST (D.), éd., *The Bible and Medieval culture*, Leuven, 1979, pp. 127 - 141; Idem., *Pour l'édition critique de la Bible française du XIIIe siècle*, in : *La Bibbia in Italiano tra Medioevo e Rinascimento. Atti del Convegno Internazionale, Firenze, Certosa del Galluzzo, 8-9 nov. 1996*, Firenze, 1998, pp. 229-254; Idem., *The Origins of the 'Old French Bible': The Significance of Paris*, BNF, ms. fr. 899, in : *Studi francesi*, CXXVII (1999), pp. 1 - 13; Idem., *Rewriting the Old French Bible : the New Testament and Evolving Reader Expectations in the Thirteenth and Early Fourteenth Centuries*, in : SAMPSON (R.), AYRES-BENNETT (W.), éd., *Interpreting the History of French. A Festschrift for Peter Rickard on the occasion of his eightieth birthday*. Amsterdam / New York, 2002, pp. 35 - 59; Idem., *On the creation of the Old French Bible*, in : *Nottingham Medieval Studies*, XLVI (2002), pp. 25 - 44; BURGIO (E.), *I volgarizzamenti oitanici della Bibbia nel XIII secolo (un bilancio sullo stato delle ricerche)*, in : *Critica del testo : Storia, geografia, tradizioni manoscritte*, VII/1 (2004), pp. 1 - 40; QUEREUIL (M.), *La Bible du XIIIe siècle. Edition critique de la Genèse*. Genève, 1988.

7 これら6写本のうち、M. 494, Y. Thompson 9, Chantilly 5は、いずれも、1884年当時にはその存在が知られていなかった完本の作例の後半部である。

8 Cl. スネッドンによる福音書伝承系統図は、1978年の博士論文掲載のそれ (p.64) が最も包括的であり上記以外の写本の伝承系統も示しているが、それ以降の論文において修正が加えられている。本稿では、1998、1999年およびこれを継承する2002年 (*Festschrift*) 発表論文のそれに従う。2002年発表の伝承系統図からは制作年代の遅い Fr. 6258が除外されており、本稿の参考図もこれに従った。cf. SNEDDON 1978, t. 1, p. 64; Idem., 1999, p. 10; Idem., 2002, *Festschrift*, p. 38.

9 初期段階  $x$  から区別される3段階は、ウルガータ訳ラテン語聖書やその註解を改めて参照し初期段階に無い註解等を追加したマイナーな改変 (改訂版  $a$ )、訳語や文体のブラッシュアップを主たる目的に改訂版  $a$  とは別個に行われた改変 (改訂版  $b$ )、そして改訂版  $b$  にウルガータ訳ラテン語聖書を参照した結果を更に加味した改変 (改訂版  $b6$ )、とされる。また、これら4段階のうち、初期段階  $x$  および改訂版  $b6$  の系統に属する写本は本来の『十三世紀フランス語聖書』後半部のみである (すなわち『増補版歴史物語聖書』後半部の作例は含まれない) のに対し、改訂版  $a$  からは『増補版歴史物語聖書』最初期の作例である3写本が派生し、これら3点以外のすべての『増補版歴史物語聖書』後半部は改訂版  $b$  に由来するという。初期段階  $x$  および改訂版  $a$ ,  $b$ ,  $b6$  の詳細については、SNEDDON 1998, p. 240-242を参照。

10 ここで提示する問題視座については、稿を改めて議論する予定である。

11 KBR 10516 と St-Omer 68については拙論2011、ChC 178については拙論2012を参照。

- 12 本図の対象から外れた初期作例まで含めると、その制作地は、さらに、イングランドやドイツ語文化圏にまで及ぶ。
- 13 『増補版歴史物語聖書』の需要・供給の中心拠点をパリとする論拠については、KOMADA (Akiko), *Les illustrations de la Bible historique : les manuscrits réalisés dans le Nord*. 4 vols. Thèse de Doctorat Nouveau Régime, Université Paris IV – Sorbonne, 2000を参照。
- 14 この問題については、2011年10月1日に慶応大学にて開催された美術史学会東支部例会における口頭研究発表において、その概要を示した。拙論、『十三世紀フランス語聖書』(*Bible française du XIIIe siècle*) 彩飾写本の展開 – 西ヨーロッパと聖地、聖俗の狭間で –。本研究発表の内容については、加筆修正の上、改めて論文として発表する予定である。
- 15 cf. BERGER 1884, pp. 111-112; QUEREUIL 1988, p. 38.
- 16 Fr. 899の様式分析については、拙論2009を参照。
- 17 Cf. SNEDDON 1998, p. 234, notes 5 – 9. スネッドンが具体例として挙げるのは、以下の写本である: Add. 40619 – 20 (イングランド); Fr. 12581 (シャンパーニュ); ChC 178 (フランス北部)。
- 18 ROBSON (C. A.), Vernacular Scriptures in France, in; LAMPE (G. W.), éd., *The Cambridge History of the Bible. Volume 2. The West from the Fathers to the Reformation*, Cambridge U.P., 1969, Chap. IX, 5, pp. 436-452, esp., pp. 446-447; cf. SNEDDON 2002, *Nottingham*, p. 32, note 27.
- 19 ただし、SNEDDON 2002 *Nottingham*, p. 43 – 44では、1240年代、オルレアンにて、時の国王ルイ9世の母后ブランシュの指示によりドミニコ会修道士により編纂された可能性を新たに提示している。
- 20 Cf. SNEDDON 1998, p. 235: « La meilleure hypothèse de travail en ce qui concerne la localisation de la Bible française du XIIIe siècle est basée sur le fait que le plus ancien manuscrit identifié jusqu'à présent est d'origine parisienne, à savoir ce même manuscrit fr. 899 de la BN, et sur le coloris francien qu'ont la plupart des manuscrits anciens du texte. Cette hypothèse d'une origine parisienne de la traduction avant 1260 environ implique une transmission relativement rapide du texte dans toutes les régions où on parle la langue d'oïl, y compris en Angleterre, avant 1300 à peu près. »
- 21 これら3点のパリ起源の作例に対し、Mazarine 35については、スネッドンはこれをフランス北部の制作としている。Cf. SNEDDON 1998, p. 235, note 1. 同写本の挿絵はフォリオ222v左コラムに辛うじて残る断片を除きすべて失われているため、この挿絵断片と装飾イニシアルのみに基づく様式分析は容易ではないが、筆者自身もこの写本を、フランス北部に由来すると考えている。この問題については、稿を改めて論じたい。
- 22 スネッドンは、この他の独立単体本の例として旧約聖書を単体で収録する Add. 40619 – 20 (イングランド、1285 – 90年頃)、コンピレーション写本の例として4種の百科全書テキスト集成にヨブ記を収録した Rennes, Bibliothèque de Rennes Métropole, ms. 593 (パリ、1303年) 等を挙げている。Cf. SNEDDON 1998, p. 234, note, 5, 8. 『十三世紀フランス語聖書』の部分写本の作例については、SNEDDON 1978, vol. 1, Appendix II, Manuscript description, cat. nos. 26 – 36も参照。
- 23 例えば、M. 494 (現在は一巻本として装丁)、Harley 616 & Y. Thompson 9, Chantilly 4 – 5 (いずれもパリの制作) など。
- 24 SNEDDON 1998, p. 234.

25 『十三世紀フランス語聖書』ではないが、『古代史（世界年代記）*Histoire ancienne jusqu'à César*』の創世記相当部分を『歴史物語聖書』創世記に置き換えた写本（Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. fr. 251：パリ、1320年代）なども知られる。また、旧約聖書のみを収録する Add. 40619 - 20は古代史の一種として、あるいは ChC 178は『古代史（世界年代記）*Histoire ancienne jusqu'à César*』の新約聖書時代を補完するテキストとして、読まれた可能性もあろう。十字軍遠征先の宮廷でのフランス語俗語文学の受容の有り方についての議論も視野に入れたい。Cf. JACOBY (D.), *La littérature française dans les Etats latins de la Méditerranée orientale à l'époque des croisades : diffusion et creation*, in: *Essor et Fortune de la Chanson de Geste dans l'Europe et l'Orient latin. Actes du IXe congrès international de la Société Roncesvals pour l'étude des épopées romanes (Padoue - Venise, 29 août - 4 septembre 1982)*, tome II, Modena, 1984, pp. 617 - 646.

26 拙論2012年。

27 ORELLI (Martin von), *Der altfranzösische Bibelwortschatz des Neuen Testaments im Berner Cod. 28 (13. Jh.)*. (Inaugural-Dissertation der Philosophische-historische Fakultät der Universität Bern, 1974), Zürich: Juris Druck und Verlag, 1975; SNEDDON, 1978, intro p. 4 -; QUEREUIL 1988, p. 37; BOGAERT (Pierre-Maurice), *La Bible française au moyen âge*, in: *Les Bibles en français du moyen âge à nos jours. Histoire illustrée*, Brépols, 1991, p. 30; SNEDDON 1998, p. 235; SNEDDON 1999, p. 10; SNEDDON, *Festschrift* 2002, p. 53. note 16.

28 下記の註32に引用する蔵書目録に加え、VOLLMER (H.), *Materialien zur Bibelgeschichte und religiösen Volkskunde des Mittelalters. Band. 1 / 2. Hälfte. Niederdeutsche Historienbibeln und andere Bibelbearbeitungen*, Berlin, 1916, pp. 31-32、そして近年では BOGAERT 1991, p. 30においても、Bern 27 および Bern 28 を2巻本構成の『十三世紀フランス語聖書』完本と看做している。

29 Bern 27については、稿を改めて論じたい。

30 Bern 28: 写本サイズ345 x 250 mm、本文37行、テキスト・コラム235 x 170 mm; Bern 27: 写本サイズ380x 265 mm、本文43行、テキスト・コラム 270 x 185 mm。

31 Bern 28, fols. 1v, 3v, 4, 354, 355v, 356、Bern 27, fols. 2, 331には、ボンガルス署名が確認される。

32 ボンガルス蔵書の来歴については、*« Ein herrliches Präsent » Die Bongars-Bibliothek seit 350 Jahren in Bern. Handschriften und Drucke aus 1000 Jahren. Ausstellung vom 24. Oktober - 13. November 1983*, Burgerbibliothek Bern, Stadt- und Universitätsbibliothek Bern, 1983 を参照。ボンガルスは、宗教戦争時に散逸したフランス各地の修道院蔵書を収集していたとされる。Bern 28 (および Bern 27) は、ボンガルス蔵書の現存最古の目録（未刊行の手稿、1634年）以来、以下の目録において確認される：① HORTIN (Samuel), *Clavis Bibliothecae bongarsianae*, Bern, 1634 (Bern, Burgerbibliothek, Cod. A 5) p. 2: « I.3.4. IX. Biblia Gallica integra, prisci & antiquati sermonis, cum brevibus glossis, Tom II. f(olio). »; ② WILD (Marquard), *Catalogus librorum Bibliothecae Civicae Bernensis*, Bern, 1697 (Bern, Burgerbibliothek, Cod. A 4; 未刊行の手稿); ③ ENGEL (Samuel), *Manuscripta, A(nno) 1740 (= Catalogus librorum bibliothecae Bernensis, 1739 - 1740, Band 9)* (Bern, Burgerbibliothek, Mss.h.h. III 110; 未刊行の手稿): バルン市立図書館の司書サムエル・エンゲルス (1702-1784) が1739-40年に作成した9巻本構成の蔵書目録。2000年に発見された新資料。写本目録である1740年作成

の第9巻 fol. 13v に Bern 27 および Bern 28 の記載がある。④ SINNER (J. R.), *Catalogus codicum manuscriptorum Bibliothecae Bernensis : annotationibus criticis illustratus ...*, Bern, 1760 - 1772, 3 Bande : 1760 - 1772 年に出版された 3 巻本のベルン市立図書館写本目録。第 1 巻 p. 18 - 19 に Bern 27 および Bern 28 の記載がある : « 27. 28. Fol. Codex membran. XIV. Biblia Gallicae Versionis. Tomus primus continet : ... Tomus secundus continet : ... » ; ⑤ HAGEN (Hermann), *Catalogus codicum Bernensium (Bibliotheca Bongarsiana)*, 1875 / 1974 (rep.), pp. 20-21 : « 27. 28. s. XIV. membr. 2° fol. 332 et 356 cum picturis, quarum pars major periit. Bongarsii fuerunt. **Biblia Gallicae versionis cum glossis**. Libri hoc ordine extant : cod. 27 : Genesis, Exodus, ... Psalterium ; cod. 28 : Proverbia Salomonis, Ecclesiastes, ... apocalypsis. Fol. 1... *teuxte. El comencament cria ... noirement vainne et uvide. glose.* (cfr. SINNER I, p. 19, sed ibi non satis recte hic locus descriptus est). »

33 これらの書き込み(1)(2)の他にも、Bern 28 巻頭・巻末の遊び紙には、以下の書き込みが見出される : (3) 巻末の遊び紙 fol. 355-356 : 四旬節のペリコープ (典礼用福音書読誦) 一覧 (fol. 355-355v ; 14 世紀、フランス ?) ; (4) 同上 : 上記の fol. 355-355v のそれとは別のペリコープ一覧 (fol. 356 ; 14 - 15 世紀) ; (5) 巻頭の遊び紙 fol. 1 : 写本標題 « Les parables salemon ... », « ... volum de la biblia en franc. » (fol. 1 ; 15 世紀)。Cf. SNEDDON 1978, vol. 1, pp. 161-163.

34 « Carta quant puja lo sol cascun dia en (Barcelona ? Valencia ?) ». Velencia の語は別の地名 (Barcelona ?) を削除した跡に書かれている。

35 HOMBURGER (Otto), éd., *Schätz der Burgerbibliothek Bern*, Bern, 1953, en part., pp. 123 - 124, No. 7, pl. 28.

36 VOLLMER, 1916, pp. 31-32.

37 ORELLI, 1975.

38 SNEDDON 1978, vol. 1, p. 23, 153-154.

39 註 6 の文献を参照。

40 スネッドンの一連の研究は、『十三世紀フランス語聖書』の 4 福音書の校定版編纂に主眼を置いているため、旧約聖書前半部のみを含む Bern 27 写本については、1978 年の博士論文以外、実質的な考察を行っていない。

41 HOMBURGER, 1953, en part., pp. 123 - 124, No. 7, pl. 28.

42 HOMBURGER (Otto), *Die illustrierten Handschriften der Burgerbibliothek Bern. Band 3: Die Handschriften des 13. Bis 15. Jh.* Typoscript, um 1960.

43 SNEDDON 1978, vol. 1, p. 162 ; Ibid., 1998, p. 235, note 1.

44 同目録で、ホンブルガーは、Bern 28 の挿絵彩飾の比較例として、HERMANN (H. J.), *Die illustrierten Handschriften und Inkunabeln der Nationalbibliothek in Wien, Band VII, 2. Englische und Französische Handschriften des XIV. Jahrhunderts*, Leipzig, 1936, pp. 123 - 124, cat. 39 (Wien, Österreichische Nationalbibliothek, Cod. 2068, *Decretales*) を引用している。引用写本の制作年代は 1310 年前後に下るものの、挿絵彩飾の比較例としては適切な作例と思われる。

45 ChC 178 については、拙論 2012 を参照。

46 SNEDDON 1978, vol. 1, p. 164.

47 13 世紀第 3 四半期のパリ写本彩飾に見られる典型的な人物表現については、例えば、拙論 2009、図

1, 2を参照。

48 GABORIT-CHOPIN (D.) et al., *L'Art au temps des rois maudits. Philippe le Bel et ses fils 1285 - 1328* (catalogue d'exposition, Paris, Grand Palais), Paris, 1998, cat. 230, pp. 330 - 331 (article par Fr. AVRIL).

49 13世紀第3四半期～1310年代のトゥールーズ・ラングドック地方由来のラテン語聖書については、Ibid., pp. 330-331 (= Stuttgart, Württembergische Landesbibliothek, Cod. bibl. 2° 8) (article par Fr. Avril); BILOTTA (M.A.) et al., *Le pavement d'autel des Cordeliers de Toulouse. Anatomie d'un chef-d'oeuvre du XIVe siècle* (catalogue d'exposition, Musée-Dupuy, 2012), cat. 4, pp. 96-97 (= Toulouse, Bibliothèque municipale, ms. 1; cf. Cleveland Museum of Art, ms. 2008.2). Cleveland Museum of Art, ms. 2008.2については、*A Third Selection of Illuminated Manuscripts from the Tenth to the Sixteenth Centuries. The Property of Mr. J. R. Ritman sold for the benefit of the Bibliotheca Philosophica Hermetica, Amsterdam*, London, Sotheby's, Tuesday 17 June 2003, lot. 8, pp. 42-51を参照。これら近年の研究でも、Bern 28は言及されていない。

50 13世紀のパリのラテン語聖書については、BRANNER (R.), *Manuscript Painting in Paris during the Reign of Saint Louis*, Berkeley, 1977; DE HAMEL (Ch.), *The Book. A History of The Bible*, London, 2001, pp. 114 - 139を参照。

51 例えば、Toulouse, Bibliothèque municipale, ms. 1: 340 x 270mm. Cf. BILOTTA 2012, p. 96.

52 Cf. AVRIL (Fr.), ANIEL (J.-P.), MENTRE (M.), SAULNIER (A.), ZALUSKA (Y.), éd., *Manuscrits enluminés d'origine de la péninsule ibérique*. Paris, 1982, cat. 83, pl. XLII - XLIII (Paris, BNF, ms. lat. 30: Catalogne, XIIIe, 3/4).

53 Cf. 同様のタイプのイニシアルを含むカタロニア地方のラテン語聖書の作例としては、例えば、Paris, BNF, ms. lat. 30, fol. 2 (cf. AVRIL, ANIEL, 1982, cat. 83).

54 Cf. AVRIL, ANIEL, 1982, cat. 82, 83; pl. XLII.

55 この他にも以下の例を挙げることができる。Paris, BNF, lat. 22, *Bible* (Bologne, 1267ca.): cf. AVRIL (Fr.), GOUSSET (M.-Th.), RABEL (Cl.), *Manuscrits enluminés d'origine italienne. 2. XIIIe siècle*. Paris, 1984, cat. 103, pl. C; XLIV-L; Paris, BNF, lat. 39, *Bible* (Catalogne, XIIIe s., 3/4): cf. AVRIL, ANIEL, 1982, cat. 82, pl. F; London, British Library, ms. Add. 50003, *Bible* (Catalogne, 1273): cf. MCKENDRICK (S.), DOYLE (K.), éd. *Bible manuscripts. 1400 Years of Scribes and Scripture*, London, British Library, 2007, pl. 105.

56 cf. AVRIL, GOUSSET, RABEL, 1984, cat. 24, pl. XIV (Paris, BNF, lat. 10136; Gène); cat. 36, pl. XIX (Paris, BNF, lat. 5114; Gène?); cat. 37, pl. XX (Paris, BNF, n.a.lat. 669; Gène).

57 Fr. Avril氏による口頭での指摘による。

2 Bern, Burgerbibliothek, Cod. 28, fol. 121

1 Bern, Burgerbibliothek, Cod. 28, fol. 34v

4 Bern, Burgerbibliothek, Cod. 28, fol. 312v

3 Bern, Burgerbibliothek, Cod. 28, fol. 244

6 Toulouse, Bibliothèque municipale, ms. 1, fol. 3v

5 Toulouse, Bibliothèque municipale, ms. 1, fol. 1

7 Cleveland Museum of Art, ms. 2008.02, fol. 1

8 Cleveland Museum of Art, ms.  
2008.02, fol. 136

10 Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. lat. 39, fol. 69v

9 Paris, Bibliothèque nationale de France, ms. lat. 30, fol. 4v